



■ CO-DIALOGUE

東野祥子

(ANTIBODIES COLLECTIVE 主宰 / 主宰)

×

水野大二郎

(慶應義塾大学環境情報学部准教授 / デザインリサーチャー)

— Review by Spectator

野口正海 (美術批評家/ 著人)

■ オープン北加賀屋

— 旧千鳥文化住宅再生日誌

家成俊樹 (dot architects)

— 街なか 糞土師への道〜初級編〜

金田康孝 (NPO 法人 コトハナ)

— 北加賀屋のエンジンたち

井上智博 (Fablab Kitagagaya 運営スタッフ / 京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab テクニカルスタッフ)

— 隠れ眼鏡店の、出張お悩み相談所！
内原弘文 (隠れ屋 1632 紙屋基組)

no. 011

Mar. 31, 2016

■ TOPICS from CFCO

■ RELAY COLUMN

眞藤明 (菅葉ライター / レーベルオーナー)
寺井元一 (株式会社まちづくりエグゼクティブ代表
取締役 / アンソニー・ジョンソンデザインディレクター)

paper

<http://www.chishimatochi.info/found/>

paper

“paper C” by Chishima Foundation for Creative Osaka



おおさか創造千鳥財団



CO-DIALOGUE

東野祥子

(ANTIBODIES COLLECTIVE 主宰/ダンサー)

10歳でダンスをはじめ、2000年、ダンスカンパニー「BABY-Q」を設立。ダンサーのほかに、音楽家、映像作家、美術家、コスチュームデザイナーなどさまざまなクリエイターが在籍。2015年より、京都に活動拠点を移し「ANTIBODIES Collective」として活動中。

×

水野大二郎

(慶應義塾大学環境情報学部准教授/デザインリサーチャー)

1979年生まれ。インクルーシブデザインやファッションデザインなど、広くデザインの研究に携わる。主な活動に社会的包摂を目指すインクルーシブデザインの普及・実践活動、デジタルファブリケーションの普及・実験の場であるFabLab Japan Networkとの協働がある。

収録日:2016年1月29日(金)

場所:味園ビル2F「秘密倶楽部アニマアニムス」(旧CAFE Q)

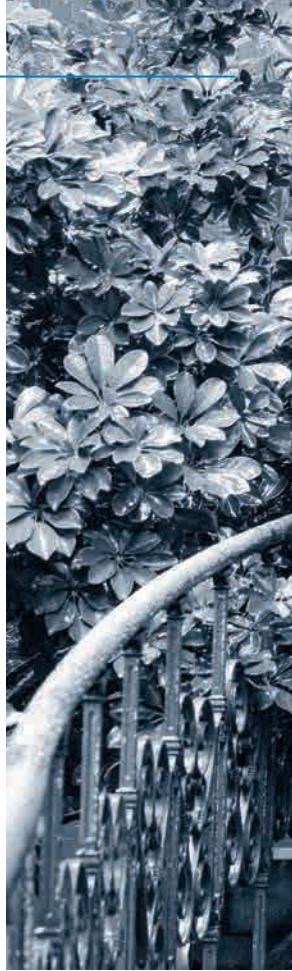


photo: Yuki Moriya

Yoko Higashino



Daijiro Mizuno

日々、代謝を繰り返す 共同体としての空間

水野:僕は、人口減少が進む日本において何かヒントがあるのではないかと、2014年から「Micro Social Agent」をテーマに、小さいけれどさまざまな機能を持つ空間について、日本各地でリサーチしています。沖縄本島北部の共同売店や香川のセルフうどん屋、そして大阪は味園ビル2階の店舗へヒアリングを行ってきました。今回のテーマ「寛容な場のあり方」にもつながる研究です。今日は実際に味園でお店を運営されていた東野さんにお話を伺いしたいと思います。

東野:私は2002年から2004年の秋まで、CafeQというダンススタジオ兼カフェバーを運営していました。何もない状態からスタートして、さまざまな人を巻き込みながら、大阪を離れるまでは味園を拠点として動いていましたね。

水野:味園を選んだのはなぜですか？

東野:2000年から「BABY-Q」というダンスカンパニーを主宰していたのですが、拠点となるスタジオを探しているときに、友人が味園ビルを教えてくれたんです。VJユニット「BetaLand」がビル地下1階の元スーパーを「Macao」というクラブに変えて、「Flower Of Life」という大きなパーティーを月1くらいのペースでは

じめた時期でした。自主スタジオが欲しかったのですが、Flower Of Life周辺の友人たちも「何か一緒にやってみよう」というのが大きな理由でしたね。水野:東野さんは当初、どんな空間をつくらうとしていたのでしょうか？

東野:紹介してもらった店舗は、片側の壁

大正～昭和初期、大阪は工業・文化都市として、「大大阪」とも呼ばれていました。大阪湾エリアには造船所が密集し、多くの人が生活を営む一方、まちなかでは縦横に走る水路が物流を促進させ、国内外のさまざまな文化が混じり合う都市として、また、異なる価値観を持つ人たちが共存できる、“寛容な場”が生まれるまちとして、機能してきました。今回のCO-DIALOGUEでは、現代における「寛容な場のあり方」をテーマに、時代ごとに多様な顔を持つ大阪千日前・味園ビルを拠点としていたダンサー・東野祥子氏、昨年味園ビルのリサーチを行った水野大二郎氏にお話をいただきました。

面がすべて鏡張りだったので、天井を抜いて壁を塗り、床にリノリウムを貼って、自分たちだけでスタジオをつくりました。当時、店舗を借りるのに敷金礼金がいらなかったんですよ。しかも、空いている店舗はすべて夜逃げした後のような居抜き物件(笑)。だから備品も残っているし、長いバーカウンターもあって、現状の空間をどう使ってみようかと考えて、料理の得意な友人とまずはイベントの一環でカフェを開いてみたんです。

水野:ダンススタジオとしての機能も持たせながら、「こんなこともできるかも？」と実験してみたんです。

東野:そうです。屋はダンスのレッスン、20時からCafeQの営業。当時、その友人とパートナーを含めた3人でバンドも組んでいたんで、練習にも

使っていました。カフェをはじめるといっても人が遊びに来てくれたんですよ。即興音楽をやる人もいたし、クラブで知り合っ一緒に遊んでいたDJも多かったんで、ヒップホップやテクノ、現代音楽、ブレイクコア、ノイズなど、多ジャンルのイベントを企画してくれて、熱気がありましたね。

水野:内装に手を入れているとき、ダンスの練習以外で、バンドの演奏やカフェの運営も考えていたんですか？

東野:最初から計画していたわけではなく、その時々で考えていたと思います。服をつくっている友だちがいれば服を置いてみたり、店内に小さなギャラリーをつくって月ごとに展示してみたり、オープンしながら空間をつくっていました。

水野:僕は、2015年の夏に味園ビル内の店を巡ってヒアリング、調査をしていたのですが、とても興味深い話を聞くことができました。仲の良い店が連携したり、お客さんがはしごをしたり、ミュージシャン

□Dance Company Baby-Q 2000年に、それまでDJ2人とのユニット「ERROR SYSTEM」で活動していた東野祥子が、豊田奈千雨と池端美紀とともに結成したダンスパフォーマンスグループ、島之内教会での旗揚げ公演以降も、寺院や野外などさまざまな場所で公演を行った。

□BetaLand COLOとHIRAが結成したイベントオーガナイズ、映像制作ユニット。2002年より、イベント「Flower Of Life」をオーガナイズ、HIRAは「HiraLion」名義でも火や水をあつめたVJ活動を行っており、全国のパーティーに参加。COLOは、現在COSMICLABの代表として、アンダーグラウンドアーティストを紹介する「Galaxy Gallery」を味園1階で運営するほか、レーベルやアパレルブランドの展開などの活動を行っている。

□Macao BetaLandが2002年に味園の地下空間を利用してつくり上げた、伝説的なクラブ。自主企画「Flower Of Life」はじめ、トランスなどを中心に精力的にイベントが開催されており、関西で活動するアーティストやクリエイターが引き寄せられていた。いとうせいこうも、かつてアメリカのイラク侵攻を批判する、劇的なポエトリーリーディングをここでやっている。

□Flower Of Life 2002年、「Macao」の立ち上げがきっかけとなり、BetaLandを中心にオーガナイズされたパーティー。音、映像、照明、デコレーション、ライブイベント、パフォーマンスなど、さまざまな要素が調和する空間を目標として、全国から多くの人が集まった。2007年のFlower Of Life 5周年パーティーでは、出演者一切無表記のフライヤーにも関わらず、全国から約2,000人が集結したと書かれている。

□Micro Social Agent 水野大二郎が考案した概念で、「市民が主体的に企画/設計/運営する小さな公共空間」のこと。昨今、少子高齢化と都市部の人口一極集中によって地域経済が停滞するなかで、市民主体の小回りの効く公共デザインが必要になっている。リサーチの結果は、相互作用が促進される空間の設計指針といったハード面や、市民主体の協働的なコミュニティの形成といったソフト面の両方に活用することができると考えられている。次回リサーチは金沢を予定。

□味園ビル 1955年に開業した、大阪市千日前のレジャービル「味園」。オープン時より、2階から3層吹き抜けの巨大空間に、キャバレー「ユニバース」を開業し、国内外の注目を得て世界屈指のキャバレーとなる。その後、時代の変化とともに大空間を区分、サウナやホテル、バーやレコード屋など、さまざまな機能をもった空間を育てていき、現在のように多様な人を受け入れることができる場が生まれていった。2011年、キャバレー「ユニバース」営業終了後、その名のまま貸しホールとなり、アーティストやミュージシャン、建築家、デザイナーなど、その独特の空間に魅了された人々の手で、多様な使われ方をしている。

参考文献:
○『月刊ビル特別総力特集/味園ビル』(BMC/2011年)
○『Micro Social Agent』(慶應義塾大学 水野大二郎研究室/2015年)

がライブの後に飲んで、また違う店で演奏したりという状況があって。

東野:CafeQを立ち上げて少ししてから、ビル内にレコード屋「カリエンテレコード」とマッサージ屋「tete」ができて、レコード屋に来た人がCafeQで飲んで帰る、というようなビルやエリア内のリンクも生まれていました。それぞれのお店で特色はあるんだけど、何かゆつたりとした連携があるんですね。

水野:僕がおもしろいなと思ったのは、吉本や松竹の若手芸人がアルバイトとしてお店に入っていて、それが萃づる式に別の仕事へとつながっていること。彼らはコミュニケーション能力が高いから、お客さんとも楽しむことができ、しかもお店で彼らのDVDが売られている。場所が人を呼び込む機能を持っているのだと感じました。同時に、こういう場所をイチからつくることは、すごく難しい。

東野:私たちがお店をはじめたときは、みんなが手探りの状態で、ただ「これがおもしろい」という信念だけがあっただけです。BetaLandの2人がアメリカで開催される「Burning Man」に参加し、帰国後にオーガナイズしたパーティーがFlower Of Lifeですが、彼らが経験してきた“表現をすることに開かれている場”をつくることに、意識的な人もそうでない人も、さまざまな有り様が味園の周辺ではありましたね。

水野:Burning Manは、ある意味イベントという枠を超えた、期間限定のゆるやかな共同体。東野さんがいた頃の味園も、根底でひとつ何か共有できる価値観を持った人たちが集まっていたのかもしれない。

□Burning Man アメリカ北西部、ネバダ州の人里離れた砂漠で年に1度、約1週間に渡って開催されるイベント。電気水道などのインフラは皆無、食料や水も持参という過酷な環境のなか、各参加者は何もない場所にまちをつくり上げ、新たに出会った隣人たちと共同生活を営み、アート作品やパフォーマンスで自分を表現しながら貨幣を使わず生き抜く。会期中は、「The Man」と呼ばれる巨大な人型の像を中心とした同心円のまわりに約5万人が生活し、最終日に「The Man」を燃やし、もとの何もなかった状態にし、祭りは終了となる。

小さな場所が担ってゆく、 さまざまな多くのこと

水野:僕が昨年、味園ビル2階のお店をリサーチしたのは、「小さい空間を上手く使っている」ということが良い知見になると思ったからなんです。香川では、製麺所を自主的に改造し、うどんを食べるスペースができた経緯があり、それが観光的な価値になっているところがおもしろい。沖縄

の共同売店は、100年くらいの歴史を持つ生活共同組合のような組織です。興味深いのは、商店としての機能以外にも、携帯電話の使い方を聞きに来たり、地域の集会所がくっついていたり、おばあ同士がコミュニケーションをとったり、機能の幅がとても広いこと。味園ビルのお店も空間自体は小さいですが、ライブが行われていたり、店長とお客さんの交流が活発だったり、店同士のつながりを楽しめたりと、一般的な飲食店とは明らかに違う広がりがあります。

東野：たしかにCafeQもダンススタジオ、飲食店、クラブ、ギャラリーなどのさまざまな機能を兼ねていましたし、人の交流も活発でした。



「CafeQメンバー・Yuka Harteと引き継いだOveNaXxと一緒に運営していたユカはお料理が得意で毎晩Qプレートというディナーセットが人気でした。OveNaXxはブレイクコアシーン担い手のミュージシャン。CafeQを開めるとなったとき、やってみようか！とかなり気軽な感覚で「CORE」という、もともとライブで音楽にストイックなお店となりました。しかも彼は、私の大阪の家も引き継いでくれました。(東野)

水野：それが今でも受け継がれているのかなと思うんです。僕は、味園ビル2階にあるお店の、独特のサイズ感と雰囲気が入っています。お店にしては大き過ぎたり小さ過ぎたり、内装もあつたりなかつたり、お客さんがいないときは店長が寝ていたり。若手芸人がライブするにはは妙に小さい。そういう中途半端に大きかったり小さかったりする余白感が、普通の店ではありえないような店長と客の交流を生んでいるのでは

東野：空間の多機能性を考えるとき、「雑多さ」がキーワードになると思うんです。CafeQが生まれたのも、私が幅広いジャンルの音楽を聞きに行き、ダンスシーンのなかだけではなく、人とのつながりが広がっていたから。また、大阪という土壌・環境の恩恵もありますね。

水野：インターネットの誕生によって、「鎌倉に住む僕が東野さんヘデータを

送り、京都でものを出力する」ことができるようになり、仕事はその土地で完結しなくなりました。つまり「わざわざその土地である必要」というものは薄れてくる。でも、CafeQや味園が大阪の雑多さに支えられているとすると、大阪という場の「変えられない部分」が見えてくる気がしますね。

東野：東京だと、シーンがそれぞれ大きくて、なかなかジャンルが混じり合わないですよ。でも大阪では、自分の知らないジャンルに触れる機会が多く、センスの交流が日常的に起こる。「笑われてなんぼ」の文化ですから、表現の交流に恐怖心のない人が多いのかもしれない。電車に乗っている普通のおばちゃんたちが、漫才みたいなやりとりをしていて、隣の関係ない人が笑っているようなことが日常ですからね(笑)。

□都市部での活用事例
「アーツ千代田3331」は、アートギャラリー、オフィス、カフェなどが同居するほか、ワークショップや講演会の開催、レンタルスペースの貸し出しといった文化的活動の拠点としても利用される。利用者は第一線のクリエイターから主婦、学校帰りの子どもまで幅広く、誰もが気軽にアーツに触れられる場となっている。一方、「元・立誠小学校」は、立誠・文化のまち運営委員会という、地域の人々による団体が運営。多様なイベントの会場として活発に利用されており、その企画数は年間100件を超える。

編集ってお金はもらえないけど、やる人がいますよね。“みんなでやる”ということを見直す時期なのかもしれません。

東野：2015年7月に「ANTIBODIES collective」というパフォーマンスの団体を新たに立ち上げました。そこで「それぞれが当事者意識を持って活動すること」の大切さを痛感しています。BABY-Qは、私が主宰

□ANTIBODIES collective
2015年、「Dance Company Baby-Q」を母体として、東野祥子とカジワラシオによって設立。映像・斎藤洋平、舞台美術・OLEO、照明・葦谷亮也、特殊美術・古館健など、国内外で活躍するクリエイターを擁する。異分野のスペシャリストが協働することで、舞台芸術の新たな地平を開くことを目指す。活動領域もダンス公演にとどまらず、芸術教育や地域活性化事業にも広く携わっているところが特徴。2015年10月には京都の元・立誠小学校、そして神奈川の横浜で、初公演「DUGONG」を行った。

するカンパニーでしたが、今度はコレクティブ=共同体として、メンバーが自覚を持って表現するスタイルに変えたんですよ。前は請け負っている感覚が強かったと思うんですけど、今は「自分が表現している団体だ」という姿勢に変化していて、形態を変えて良かったなと感じています。

水野：東野さんのような立場の人は、指揮者のように振る舞うことが重要になってきていますよね。かつては天才的なアーティストや建築家が作品をつくって、みんながそれを崇拝するスタイルだった。でも今は、みんな参加できるように采配していくことが大事。「俺の作品だ」「俺の作品にふさわしく振る舞え」と言っていた時代から「君の良い部分をせよばいんだ」という方向へと変わっているのは感じます。

東野：最近、公演を国内外各地で行うだけでなく、別府や札幌、北九州、横浜など各地でオーディションから舞台作品をつくるプロジェクトに携わっているんですが、地方で滞在制作を行うとき、参加者のなかには初めての人もいれば経験者もいますよね。そんなとき、グイグイ個人につっこんで、その人の良いところを引き出そうとしてみるんです。例えば、ダンスはできないけれど、普段薬剤師をしているという人には、「薬の名前を連呼しながら動く」という役」を渡すと、舞台は初めてでも自分の確立されたものを生かせるから自信を持って役を担ってくれる。個々の得意な部分を伸ばすことでひとつのシーンが生まれ、それがつながって作品になる。テクニカルメンバーは揃っているの、後はダンサーのポテンシャルを引き出す努力をしているんです。

水野：いつからそういったスタイルでつくっているんですか？
東野：BABY-Qでも、肩甲骨の動きがおかしいダンサーがいて、背中にフォーカスしてシーンを演出していましたね。ダンスのフォームがきれ



「2015年夏、アニメアニムスさん参加と観客に誰かがカクテルを注文した。すると突如爆音でデスメタルが流れ、「穴あき包丁」が全員に配られた。そして店長の「アナーキー！(穴あき)」というシャウトとともに、全員が包丁を突き上げた。笑い起こったあと、そそくさと全員から包丁を回収する店長。客同士は同時に「ゆるく」つながり、パーは不思議な連帯感を帯びたのだった。(水野)

ないかと。妙に人間のサイズに合うんですよ。東野さんは、どんな余白がこのビルにあると思いますか？

東野：当時から、なんでも許されてしまう雰囲気はありましたね。CafeQのイベントはかなりの爆音でしたし、イントレ(=舞台で使う足場)を使った舞台セットを制作しようとしていて、味園ビルに「屋上で立てて練習してもいい？」と聞いたら、社長から直々にOKが出て、夜な夜な練習したことも。

水野：単に味園の持つ磁場に人が集まるといだけでなく、社長が理念を持って場所を運営しているからこそ、成り立っている。

東野：それも大事なことだと思います。当時は、社長が管理をされていて、非常に協力的で審査もなくお店をはじめさせてくれました。隙間だらけ、というサポートしてくれるという感じでしたね。

水野：そういったゆるさが、ビル全体を育ててきたのでしょうか。日本が確実に人口減少していくなかで、幅広い機能を持つ空間のあり方が重要になっている。人口が減るといことは、つまりまちをコンパクトにしなければならない。でも、ゼロからつくる余裕はないから「小さいのに多機能」な場所を既存の施設を転用してつくる必要があると思うんです。廃校の利活用が進められているのも同じ理由。実際に、都市部では「アーツ千代田3331」や「元立誠小学校」のような、活用事例も生まれています。

中心のある“カンパニー”から自立型“コレクティブ”へ

水野：東京でも、震災以後状況が変わりつつあって、例えばトマトひとつとっても、本当だったらトマトの価値は味ですが、今は「この人がこの地域でこういう農法でつくって」というのも価値になっている。つまり、食べる前の情報も価値になっているんです。そういう状況を「半商品性」という言葉で表現した人がいます。

□半商品性
哲学者の内山節によると、半商品とは「市場では商品として通用し、流通しているが、それをつくる過程や生産者と消費者の関係では、必ずしも商品の合理性が買かれていない商品」のこと。近代以降の市場では、「価値と価格」のバランスだけが重要であった。しかし、近年「フェアトレード」「地産地消」などの言葉に代表されるように、相補交換や相当交換にも類似する半商品の世界に対して注目が高まっている。

東野：たしかに、変化を感じますよね。価値を貨幣に換算するだけではない、交換や授与の仕組みも変わりつつある気がします。私自身は、貨幣経済に振り回されない距離感を保っていたいとも思います。

水野：資本主義経済を完全に否定もできないし、取り替えようもないので、上書きする方法を考える必要がありますよね。その流れは、東京以外の場所の方が話をしやすいし、可能性があるのではと思います。

東野：大阪では、個々が持っている技術を交換し合うような、それこそCafeQがそうですが、昔から自然と起こっている状況がありますよね。

水野：1990年代に「インターネット社会ではお金以外のものを追求するようになる」と指摘していた人がいるのですが、例えば、Wikipediaの

いな作品をつくる作家もいますが、私の場合は雑多な人間性を見出したり、状況を構成したりしています。

水野：最近、デザイナーやアーティストの職能が再編集されていますよね。例えば彫刻家の名和晃平さんは、「SANDWICH」というチームで住宅設計やインテリアのデザインにも取り組まれています。そういった流れがあるなかで、「みんなでつくる」ためには、関わる人たち全員の「自分はやりたくてやっている」という感覚をどうつくるかが大事だと思うんです。

東野：そして、自立した表現を各々持っていることも肝心ですね。

水野：でも、それが意外と難しい。まだ多くの人が「つくるなら買った方が早い」「自分が踊るのはちょっと」と考えてしまいがち。東野さんがカンパニーを運動体へ変化させていったように、みんなが参加できるプラットフォームがあることで可能性が広がる気がします。

東野：そうですね。受け手側にも寛容さが必要で、個々がつくったものを安易に否定せず、みんなでブラッシュアップしていくプロセスも大事。そうやって意識を少し変えるだけで、作品がもっと大きなものになったり、価値が上がったりすると感じていて、それがおもしろいんですよね。

水野：参加する側の自由を担保したんですね。それを可能にしたのは、ある種の「ゆるさ」。今後の大阪やほかの地域を考えていく上でも、良いポイントになりそうです。単に「大阪は良いまちだよ」と発信するのではなく、さまざまな価値が交換、共有される「ゆるさ」を持続できる場を創造すること。それを維持しながら、多くの人に広く参加してもらうことで、もっとおもしろい空間や場、まちへ変わっていくのだと思います。 C



「当時は毎週末、いろんな音楽シーンの交流がありました。バンド・赤犬のメンバーのひとり「BABY-Q」にも出演していたのでミニマムスによくライブしてきました。灰野敏二さん(もろちん禁煙)やオシリベンベンスのほか、GULPEPSHやKA4U、DODDODOなどのMIDI_saiクルー、DJのCMTやDNT、ノイズアーティストのドルフや海外からもいろんな人が来ていましたね。(東野)

Review by Spectator

立会人：野口卓海(美術批評家/詩人)
安全に稼働させるため用意された、意図のある余白とも呼べるだろう。お2人の対談に同席し、味園ビルもまた都市の持つ“あそび”であったことを知る。機能や役割を限定されていない未分化な場所だったからこそ、軽やかにジャンルや分野を越境しながら、おそらく現在の姿が形成されたということ。それは誰か個人の思惑によるものではなく、たくさんの人々が交差するなかで味園ビル自体が夜毎の更新を繰り返してきた結果なのだ。社会構造からは容易くはじ

こ数年、“あそび”について考えている。乗用車のハンドルやアクセルといった、構造体の結合部に配された“ゆとり”のことだ。あれらは物事や機構をスムーズに、あるいは安全に稼働させるため用意された、意図のある余白とも呼べるだろう。お2人の対談に同席し、味園ビルもまた都市の持つ“あそび”であったことを知る。機能や役割を限定されていない未分化な場所だったからこそ、軽やかにジャンルや分野を越境しながら、おそらく現在の姿が形成されたということ。それは誰か個人の思惑によるものではなく、たくさんの人々が交差するなかで味園ビル自体が夜毎の更新を繰り返してきた結果なのだ。社会構造からは容易くはじ

かれてしまうであろう尖った嗜好さえ、この鷹揚なビルはやんわりと許容してくれる。半ば運動体のようなこの場所が生み出す磁場は、ゆるやかに共有できる趣味的な射程をこれからも拡げていこう。ただひとつ危ういことがあるとすれば、前衛が目的へとすり替わることだ。精神は尖るべくして尖るのであって、決して尖らせようなどと思つてはならない。非常句に陥ったアヴァンギャルドほど退屈なものはないのだから。味園ビルが、これらも多くの人にとって手段の集合体でありますように。隙間や余白を扱うとき、即興的な知恵や反射的な感性が必要になってくる。それらは常に別の場所へ代入不可能形をしていて、だからこそ一般化できない。固有の魅力とはそういうものだ。文化とは余白や隙間といった“あそび”にこそ宿り続けてきた。私たちの都市や社会に、まだそれらはあるだろうか。

オープン北加賀屋

地域の出来事をひらく、伝える

旧千鳥文化住宅再生絵日誌

家成俊勝 (旧千鳥文化住宅PJ設計担当)
2004年、赤代武志と建築事務所dot architectsを共同設立。
北加賀屋を拠点に、さまざまな企画に関わる。

旧千鳥文化住宅プロジェクトとは、高度成長期のどさくさで建ったらしい店舗とアパートが一緒になった建物をおもしろい場所に変わっていくプロジェクトです。2014年からスタートし、千鳥土地のみなさんやgrafの服部滋樹さんとともにどういった使い方をしようかと考えてきました。その年の秋には、dot architectsメンバー・土井亘くんのスタジオンバイ所属時代の同僚・スイス人フィリップと一緒に現況調査をしました。フィリップはインクレディブル(信じられない)と連呼していました。小さな部屋や通路が迷路のように連なり、廃材を流用してできたボロボロの構造がなんとも言えない魅力を放っています。普通なら取り壊しますが、その魅力にやられて改修の道を選びました。建物が持っている独特の空気をどこまで残せるかが大切です。昨年には構造家の満田衛資さんにも現場を見ていただき、構造補強の道筋を探っています。

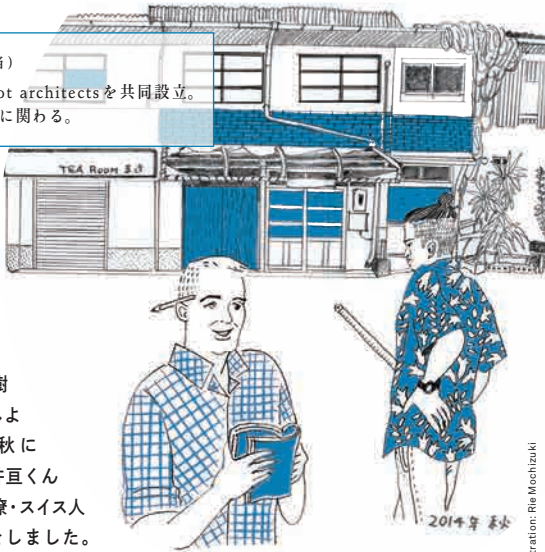


Illustration: Rie Mochizuki

もうすぐ解体です。プロジェクトがスタートした時はまだ何をするか決まっていませんでしたが、打ち合わせを重ねてなんとなく使い方が見えてきました。ひとつはFabLab Kitakagayaにいるアーティストの望月梨絵さんに手伝ってもらおうと思っています。詳しい話はまた今度。

隠れ眼鏡店の、出張お悩み相談室!

お答えするのは……
内原弘文 Hirofumi Uchihara

眼鏡士、眼鏡作家。2011年より北加賀屋に「隠れ屋1632 秘密基地」を設立。完全オーダーメイドのめがねをつくる。

お悩み

目は悪いけど、めがねは嫌い!

会社の上司と電信柱を見間違えてしまい、これはいかん! とめがねを買ったんですが、やっぱりめがねはかけたくない……。裸眼のままだとまた上司に怒られてしまいます!

こたえ



そんなときは……

しゃれこうべめがね!

めがね嫌いの人のための、めがねを超えためがねがこれ。一人ひとり異なる頭の骨格、耳の位置、視力をしっかり計測してつくるから、顔へのフィット感、かけ心地は抜群ですよ!

みんなのうえん×淀川テクニック
街なか糞土師への道 ~初級編~

今年のアートプログラムのテーマは、ざばり「野糞」。住宅街にある農園で、ゴミアーティスト・淀川テクニック柴田氏と、「うんこ」について真剣に考える、かなり不安な取り組みだ。まずは、「野糞」で世界を救うノグソフィア・伊沢氏をお招きし、話を伺った。師いわく、生物は必ず何かを排泄し、ほかの生物が利用するという自然の循環がある。人間は「うんこ」を排泄するが、呼吸に必要な「酸素」は植物の排泄物だ。と。今、人間は自然界のなかで役割を果たしているか。暮らしから隔絶された「うんこ」の行方に思いを巡らせることが糞土師道の第一歩となった。



▲「みんなのうえん」に自生していたよもぎを重ね、即席のお尻ふきをつくる伊沢正名氏

金田康孝 (NPO法人コトハナ)
まちづくりや農業のプロジェクト、アート・暮らしにまつわるイベントを多数企画。北加賀屋みんなのうえん管理人。築50年の長屋でリノベーション暮らしを実践中。

北加賀屋のエジソンたち



OPEN DATA
[fable] <https://fable.cc/tomohiroinoue/xxxxxxxxx>
[Thingiverse] <http://www.thingiverse.com/thing:1206503>

case 01:
井上智博 / デジタル民族楽器

使用者自らの手で作られていた民族楽器。それが、工業化による大量生産で誰でもお金を出せば手に入るようになった。その反面で、つくり方はブラックボックス化し、つくる人と演奏する人は分離してしまう。以前にあった、「MAKE」の文化を再考し、新しい現代のツールでリデザインすること。民族打楽器、アサラトからパチカの系譜の延長線上に、3Dプリンタという新しい道具を使ってつくることのできる新しい楽器を提案している。

井上智博 (FabLab Kitakagaya 運営スタッフ/京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab テクニカルスタッフ)

TOPICS from CFCO

おおさか千鳥財団 (CFCO) は、大阪で行われる芸術、文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

REPORT

1 「Open Storage 2015 - 見せる収蔵庫 -」開催報告

2015年10月~11月に、工場跡を活用した大型美術作品の収蔵庫MASKを一般公開。今回のメインアーティスト・宇治野宗輝が、約1ヶ月に及ぶ滞在制作を行い、高さ7mの巨大サウンド・スカルプチャー《THE BALLAD OF EXTENDED BACKYARD, THE HOUSE》(建築設計: dot architects、片岡慎策)を生み出しました。展示最終日には作品上で野宮真貴 & BIBAのライブも実施。また、京都造形芸術大学の協力を得て、子ども向けの対話型作品鑑賞ツアーも開催し、260名が参加しました。

次回の一般公開は2016年秋を予定しています。今後も、アーティストとともに「創造する収蔵庫」として、可能性の拡張を試みます。

展示期間: 2015年10月31日~11月23日 会場: MASK [MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA] 参加作家: 宇治野宗輝、金氏徹平、久保田弘成、名和晃平、やなぎみわ、ヤノベケンジ



photo: Ai Kitakagaya

クローキングで行われた野宮真貴 & BIBAによるパフォーマンス

NEWS

マーケットイベント
「KITAKAGAYA FLEA」開催

IN/SECTS
KITAKAGAYA
FLEA at CCO
MAY 20 21 22 2016

名村造船所跡地 (CCO) を舞台に新たなマーケットイベントがはじまります。農作物やフード、グッズなど、さまざまなつくり手と出会い交流できるマーケット。北加賀屋のまち巡りや北加賀屋を舞台にしたロゲイング、クリエイティブ体験イベントやライブなどを3日間にわたって開催。主催・インセクツの10周年も兼ねて、ローカル・カルチャー・マガジン『IN/SECTS』に関わってきた豪華ゲスト陣が出演します!

日時: 2016年5月20日(金)~22日(日) 会場: クリエイティブセンター大阪 (CCO) 大阪府住之江区北加賀屋4-1-55
出演: 蓮沼帆太、アサダワタル、辺口芳典ほか
出店: Appleの発音、旧ヤム邸、ピンポン食堂、strato、ON THE BOOKS、FOLK old book store & restaurant、北加賀屋みんなのうえん、裏庭植物店、MASAGON、タダユキヒロほか

※詳細はインセクツのWebサイトをご覧ください
URL: <http://www.insect2.com/>

ACTIVITY 2015年度創造活動助成

1 Pulp 5th Anniversary Exhibition
NON FICTION 2015
<http://pulp.space.org/>



photo: Kazuki Watanabe

いわゆるアートや特定の文脈に縛られることなく、刺激的な表現を発信するスペースPulpのオープン5周年を記念し、萬福寺にて開催。海外からの参加も含む9組のアーティストが、寺という格式高く形式張ったイメージのある場で、襖や掛軸という、失われつつある日本の原風景をキャンバスとし、それを利用して、もしくは壊す表現を行った。

文・田窪直樹(ギャラリー「Pulp」ディレクター)

2 Double Good Artist in Residence
水内義人(美術家)、辺口芳典(詩人)
<http://doublegoodartist.tumblr.com/>



photo: Ryo suke Kikuchi

片道切符だけ用意し、オモロい人誘って、どこかへ出かけて行く。行った先で稼ぎ方を考え、またそこでオモロい人と出会う。そんな仕組みの第1歩として、ドラマー・和田晋侍とともに、シアトル、ビクトリア、ポートランドへ行って来た。幸運な出会いがあり、ささやかながら自分たちの方法で稼ぎパンを食べることはできた。パンは剣よりも美味しかった!

文・辺口芳典(詩人)

2 「paperCの宴とヘボコン」開催



「paperCの宴とヘボコン」トーナメント対戦中の宴会風景

2015年12月13日、大阪・なんばの「味園」大宴会場にて、『paperC』特別号発行記念イベントを開催しました。当財団の助成活動報告会も兼ねて、クリエイティブに関わる・興味のある方々に交流していただくイベントをどんな形にするか。これまで『paperC』に関わっていただいた方々と共に、約1年かけて企画を練りに練り、決まった目玉コンテンツが「ヘボコン」でした。当日は16組のチームが自作のヘボい=技術力の低いロボットを持参、熱い戦いを繰り広げ150名超が集う会場は大盛況! トーナメント戦の優勝チームは「チームおおくぼ」、投票により最もヘボいと認定されたのは「チーム金田」でした。

日時: 2015年12月18日 会場: 宴会天国「味園」大宴会場 企画: おおさか創造千鳥財団+MUESUM 企画協力: 石川大樹(デイリーポータルZ)、津田和俊 (FabLab Kitakagaya)、原田祐馬 (UMA/design farm)、松倉早屋 (ovaqe)

音楽をかけることが場をつくる

アメリカ、ロサンゼルスを拠点に、もう15年以上も非営利で運営を続け、世界中に熱心なリスナーを持つネットラジオ局「dublab(ダブラブ)」その日本ブランド「dublab.jp (http://dublab.jp)」を、数人の有志とともに3年ほど前に立ち上げた。自分たちが聴きたい音楽をかける、という至極シンプルだが、こと日本では実現することがなかなか難しい理想をかがけてはじめてきたのだが、実際に放送をはじめると、ラジオは自分たちに予期せぬ新たな発見をもたらした。

それは、一言で言うならば「場所」を意識したということだ。音楽には場所がある、という事実



原雅明
Masaaki Hara

音楽ライター/レーベルオーナー
音楽評論家として執筆活動の傍ら、レーベル「rings」のプロデューサー、LAの非営利ネットラジオ局の日本ブランド dublab.jp の運営も務める。単著に『音楽から解き放たれるために - 21世紀のサウンド・リサイクル』。

>原さんが選ぶ次のコラムニストは…
ドミニク・チェン氏(起業家・情報学研究者)
社会から芸術まで創造性の発展の考察、さまざまプロジェクトの企画、開発をされています。(原)

リレーコラム

つないで見える、
人とまちの多彩なあり方

MAD Cityで考える、まちづくりの未来

「まちづくり」は「街づくり」と比べて新語の類だと言われています。都市計画などハード的な取り組みの先に、コミュニティデザインをはじめソフトの施策が求められるようになった時系列があるのでしよう。歴史的に、まちづくりの現場では常にハードが不足していて、産業もハードと一体だった。しかし今やハードは余り、維持に腐心するものです。とはいえリノベーション然り、実際には未だに、まちづくりにおいてはハードの存在に重きが置かれている気がする。そのことに、僕は違和感を感じています。

2010年からの「MAD City」は、千葉・松戸



寺井元一
Motokazu Terai

株式会社まちづくりエイトライブ代表取締役/アソシエーションデザイナー
1977年生まれ。2002年、NPO法人KOMPOSITIONを設立。横浜桜木町の壁画プロジェクト、ストリートバスケット大会「ALLDAY」など、表現者の支援を事業化してきた。2010年、まちづくりエイトライブ設立。千葉・松戸で「クリエイティブな自治区」を目指すMAD Cityプロジェクトを開始。

>寺井さんが選ぶ次のコラムニストは…
林曉甫氏(NPO法人inVisible マネージング・ディレクター)
アートと地域をめぐり、新たな関係性を探る最前線にいるおひとりだと思います。(寺井)

に改めて気づかされたのだ。音楽には演奏する場所も聴く場所もあるが、単に受け皿があるという意味合いではなく、音楽が場所をつくるということである。dublabは、普段、小さなカフェの一角から放送をしているが、そのカフェには放送することで集まってくる人がいて、カフェの風景も少し変わり、新しい出会いも生まれる。また、出張放送も行って、さまざまな場所へ向いて放送することも行っている。ホテル、海の家、山奥のフェスティバルなど、ネットさえつながっていれば基本的に放送はできるので、声がかかればどこへでも出向く。そうしたことを続けているうちに、良い音楽をかけることのほかに、ラジオにはもうひとつの場所をつくり出す力があるのだということに気がついた。

例えば、なぜホテルがdublabのようなラジオに興味を持つのかというと、それは良い食事を提供するので同じように良い音楽を提供したいということ、それに伴って人が交わる場をつくりたいということだった。人は居心地の良さを五感すべてで感じるが、これまでは場所がつけられるときに、「耳」に関してはおそらく最後に考慮されることが多かったのだと思う。しかし、場所への意識が高まれば高まるほど、最後のピースであった「聴くこと」が、ちよつとした、しかし決定的でもある違いや価値を生み出すことに人は敏感になりはじめているのだと思う。

の一角に徒歩圏の狭小エリアを宣言し、エリアに眠っていた70軒超の空き家や空室に、クリエイター層など200人超を呼び集めてきました。その間、ハードの取り組みはほぼ皆無。リノベーションは住民がセルフで行ってきたし、空きスペースや河川敷のような公共空間で、ソフトたるアイデアを持ち込むことでまちを変えてきた。「一貫しているのは「まち」(ハードでなく)人である」という価値観です。

違和感には、ハードと結びついた産業のゾンビ化現象も関係しています。公共事業と近いまちづくり事業が、意味を失った既存ビジネスを延命させる装置になっている現実もある。今後広がるであろうシェアエコノミーは、UberやAirbnbにも顕著なように、既存の産業から市場を喪失させ破壊する側面を持っています。それは彼らが革新的な事業を行っている証左でもある。まちづくりにおけるソフトへの注目は、革新への防波堤的な反動なのか、それとも革新そのものなのか。

ITの世界では、スマホネイティブが実生活やビジネスを変えています。同様に、真にソフトドリブンなまちづくりの時代が、革新的な事業性を帯びて産声を上げる気がします。そのとき——私たちはアソシエーションデザインと呼んでいるのですが——「まちは人でできている」ところから、改めてまちづくりの手法を考えるべきだと思うのです。